

女体幻想

中村真一郎



女体オムニバス小説集！

異次元空間に咲きにおう鮮烈の花々
老いたる旅人の美の根源への航海！

新潮社版

女体幻想

中村真一郎

女体幻想

一九九二年二月一日発行
一九九三年二月一日四刷

著者 中村真一郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話 営業部 03 三二六六 五一一

編集部 03 三二六六 五四一一

振替 東京四 八〇八

印刷 株式会社光邦

製本 株式会社大進堂



© Shin'ichiro Nakamura 1992,
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-315517-5 C0093

価格はカバーに表示してあります。

女体幻想・目次

5

瞳

121

4

脣

93

3

髮

65

2

背
中

37

1

乳
房

7

10

顔

257

9

腰

231

8

掌

199

7

臍

173

6

茂
み

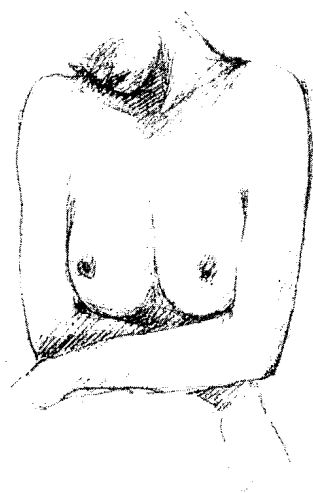
149

装画・本文插画 榎 俊 幸

女 体 幻 想

1

乳房



あの深い沼の底から、からまりつく幾条もの藻の執拗な手のあいだを通れのがれ、次第に水面に浮びでてくる、水すましか何かに自分が変身していた感覚。

ようやく水の外に到達して、空気のなかで眼を見開くと、頭上は真の闇。厚い壁のような闇。この闇に包まれている意識が、人間のものであることに次第に気付いて来ると、水すましの感覚のなかから人間の体感が生れ出て、それが現実のものとなって拡がって行くのが判る。その短かい時の移り行きが、夢から覚めつつあるのだ、という自覚を与えてくれる。

しかし、次の瞬間、人間にもどった彼は、今がいつなのか、自分が誰なのか、というぼんやりとした疑問に捉えられる。これは幼時に深い昼寝から覚め、傍らに誰もいないのを意識した瞬間に、時どき襲われた、あの感覚に似ている。

しかし、今、自分を押し包んでいるのが、あの眩しい幸福感に満ちた、陽の光りではないことから、自分が幼児ではないことが感覚的に覺^{きと}られる。いや、あるいは自分の魂は今ある、どの個人の、どの生の時期の一瞬に目覺めたのでもなく、ひとりの人間の生の軌跡を辿りおわり、その活動を停止して元素に分解しようとする直前の肉体を脱して、無明の闇の底に降って行つたあとで、時間も空間もないところで水すましの肉体のなかに転生したのが、その幼く小さい水棲動物の身体にうまく慣れない魂が、前生の人間だった時を夢見て、そしてだから、自分は今、水すましの夢のなかに眼覺めているのかも知れなかった。そう言えば、自分は人間だった頃、夢からまた別の夢のなかに眼覺め、更にまた眼覺めると、そこもまた別の夢のなかだった、という夢の世界の遍歴の経験^{きん}を、屢々繰りかえしたものだつた。そして、その度に、その経験のなかに、長い数々の魂の輪廻の遠く仄暗い記憶の影を感じたのだ。

と、そこまで連想の糸が手繰られて来た時、急に彼は人間であつた自分に、刺すような鋭い郷愁を感^{かん}じした。今なら、このまま、人間の生の方へ、眼覺めることができるかも知れない。あの、きりのない夢の遍歴の輪から、いつも強い意力によって現実の世界に戻ることができたように。

あんなか弱い水すましの小さな殻などは突き破つて。——
彼は強い意力を集中しようとした。それが胸に血を呼び集めたのだろう。突然に生まな

ましい人間の肉のなかに、自分の魂が引き返しているのが感じられた。いや、意識が息づく肉体の感覚だけに満たされた。

その瞬間、もう一度、あたりの闇が、更に厚く、更に耐えがたいものとして、彼の身体を呪縛してきはじめた。

ああ、おれは今、棺桶のなかにいる。そして、生きた肉のまま灰にされようとしているのだ、という恐怖感が全身を包んでくる。それは、いつか子供の頃に、何かの折りに、着物を着たままで水のなかに落ち、そこから引き上げられて濡れ鼠のように川原の小石のうえに立った時の、ぞつとする死への嫌悪感と、肉体的な不快感とを、不意によりがえらせる。

気が付くと、彼の闇のなかに横たわる人間の肉体は、寝汗にびつしよりと濡れた寝衣に、からみつかれている。その感覚が先ほどの沼のなかを上昇する水すましに、夢のなかの彼を変身させたのだろう。

その悪感、脚の凍りつくような冷たさに気付かせる。おれは、もうやはり半ば死にかけているのかも知れぬ。いや、一度は息を引きとった肉体が、こうして棺桶に入れられ、そこに無明の闇をさまよいはじめた魂が、道を間違つて一旦は離れた肉のなかに戻って来て、そして驚かされた肉が息を吹きかえしはじめたのだろうか。

そこで、彼は闇のなかで、不意に更に夢の膜の外へ意識が突き破つて、現実の空気にな

かへ出たのを感じる。おや、自分は今、「おれ」と、この息をとり戻した臂で呟いたようだ。その微かな声が耳もとの深い闇のなかに聞えたような気がする。とすれば、その「おれ」というのは、一体、誰なのだ。いつの時代の、何という名前を持ち、どのような歴史を生きている個人なのだ。

そういう問いが、もう一度、今度はより切実に戻って来た途端、彼は突然に恐怖に満ちた孤独感のとりことなる。

次の瞬間、彼の手は本能的に、冷えきった寝具のなかを伸び、傍らで暖かい空気を発散させている肉の塊の、その胸のあたりをはだけ、そしてもう、その柔かい盛り上りを掌に捉えていた。

そうだ、彼は棺桶のなかの囚人ではなく、その手はおのれの意志以上の、おのれの生命を生んでくれた大いなる何者かに導かれて、意外にも遮ぎるものもなく、まっすぐにその暖かい肉の丘に到達することができたのだ。闇のなかには、彼の手をこばむ棺桶の外枠の木の板などはなかったのだ。

彼の指先は、その眠っている柔かい肉の丘の、頂きにある小さなつまみを、ゆつくりと二本の指のあいだに挿んでみる。そうして、緩やかに、その可愛い肉の芽をもみしだくようにする。

何という心の安らぎ。その二本の指のあいだから、甘い生命の流れが、腕に伝わってきて、やがて冷えきった、半ば死んでいる心臓のまわりにまで波打ちながら到達し、丁度、暁の光りが海の彼方を赤く染めて行くように、眼に見えないそのハート形の肉の袋に、いのちの灯を次第に強く輝かせて行く。

それはもう、長いあいだ、彼には馴染みとなった甘美な感覚——日だまりで、枝から重く垂れてゐる熟した果物の液を、仰向いて吸っているような、安らかな幸福感——である。そして、充分に肉体の闇のなかのいのちの袋を明るませたあとで、ふたたび掌はゆつくりと、その肉の丘の独特のなめらかな感触を味いつづける。掌に感じる肉の表面には、長い年月のあいだに緩かな変化が現れている。幾分、柔かさを増し、また表面の肌の緊張を失い、その代り鞣したような^{たお}なやかさが加わり、指は昔より抵抗が少く丘のなかに食いつて行く。その感触の慣れのなかでの微妙な変化が、歲月というものを掌に教え、その時間の自然な流れの感覚、それが新しい未知の出会いでなく、いつもの親しい手ざわりである、という確認が、彼の魂に平和を与えてくれるのだ。

ああ、男性としては、平均よりは小さい子供に近い掌の空間。その半世紀を遙かに越すこの世の風雪にさらされたにも係らず、女のもののように表面が柔軟だといわれる、わずかな皮膚のきれはしが、今、彼にとっては仄暖かい魂の平和と、それを支えてくれる生の持続の静かな流れのような感覚を、そこに、傍らに横たわる懐かしい肉の丘から吸いあげ

る道具となっているのだ。

少年の頃から、数知れぬ快楽と官能とを吸収する器官であつた、五本の枝を持つこの小さな肌のくぼみが、今、闇黒の死の世界から必死に甦ろうとする彼に、いのちの証拠を撫でいつくしむ優しい袱紗のようなものとなりおえている。その息をひそめるような思いは、やがて、彼には胸に浸みいるような哀れな気分となつて迫つてきた。

その哀傷の気持が、彼のかなり覚めてきた意識を、七十歳に近い、この現代に生きる、ひとりの男という、ひとつの現実の確たる人格の手ごたえのなかに、もう一度、夢の膜を突き破るようにして甦らせた。

すると同時に、自然の反応としてその今、彼の掌が祈るようにして繰り返して戯れている肉の丘の持主にも、ひと撫でごとに薄皮を剥ぐように、ひとつの女の人格となつて立ち現れてきた。

その時、その掌の愛撫が、ふたつ並んだ遠い方の丘に移つたのを、眠りのなかに感じたらしい、横たわつたままの肉は、眠りのなかに意識を涵ひたしたままで、半ば身を傾けて、彼に背を向けた姿勢となつた。

そこで彼は、逃げようとするその肉の丘を思わず強く握り直したままのおのれの掌に引かれて、相手の背中にぴたりと身を寄せることになる。西人のいわゆる「二本のスプーンを重ねた」形となつた。